

日本経済学会2018年度秋季大会
@学習院大学(9月9日(日))

岩崎・武藤・新谷 “Missing Wage Inflation?”

Estimating the Natural Rate of Unemployment in a Nonlinear DSGE Model”

討論

塩路(一橋)



全体的評価

- トピック＝喫緊の課題
 - しかし皆、答えがわからず困っている・・・日本以外でも



本稿のこたえ(日本について)

- 「これまでの賃金が高すぎたから」
 - 90年代末から大幅に下がってはいなくてはならなかったのに、そうならなかった
 - 失業率が上がったのもそのせい
 - いまやっと失業率に見合った賃金水準になってきた(これから賃金は上がります！)
- 検討に値する仮説といえる

全体的評価つづき

- アプローチ：賃金調整だけを取り出すのではなく、均衡モデルの推定の一環として分析したところに価値がある
- 手法：最新の非線形モデルの推定手法を使い、しかもその利点をフルに活かしている。

主なコメント(3つ)

主なコメント①

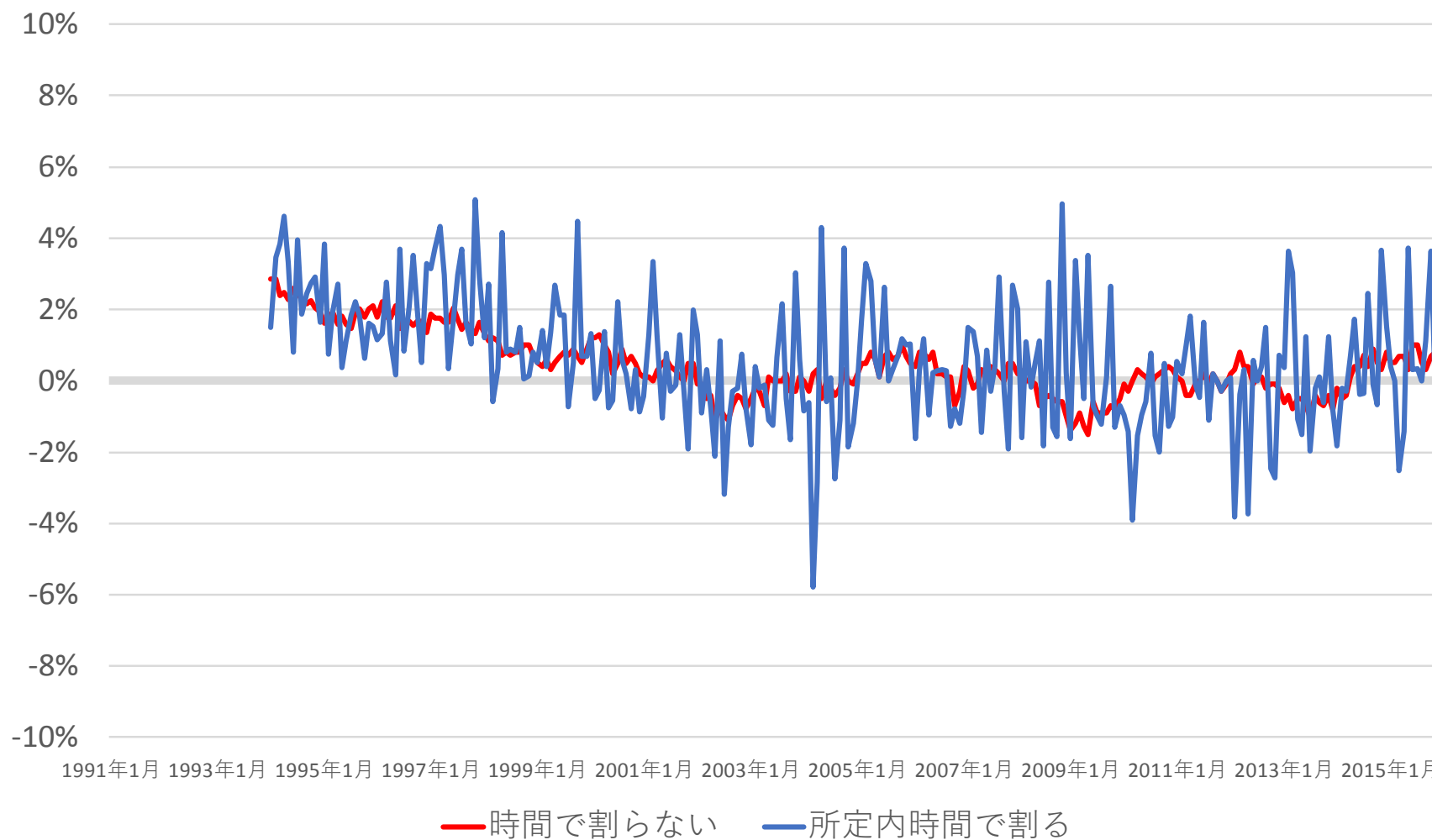
労働者の構成変化の持つ効果について

- 賃金データ＝「総平均」：就業者の構成比の影響を受ける
- 正規・非正規の区別を考慮すべきでは？
 - － （日銀国際コンファレンスでの本稿討論者=Arce氏(スペイン銀行)も同じことを言っていた）
- 本稿が使用する毎勤について言うならば・・・

「一般労働者」は月給にStickiness

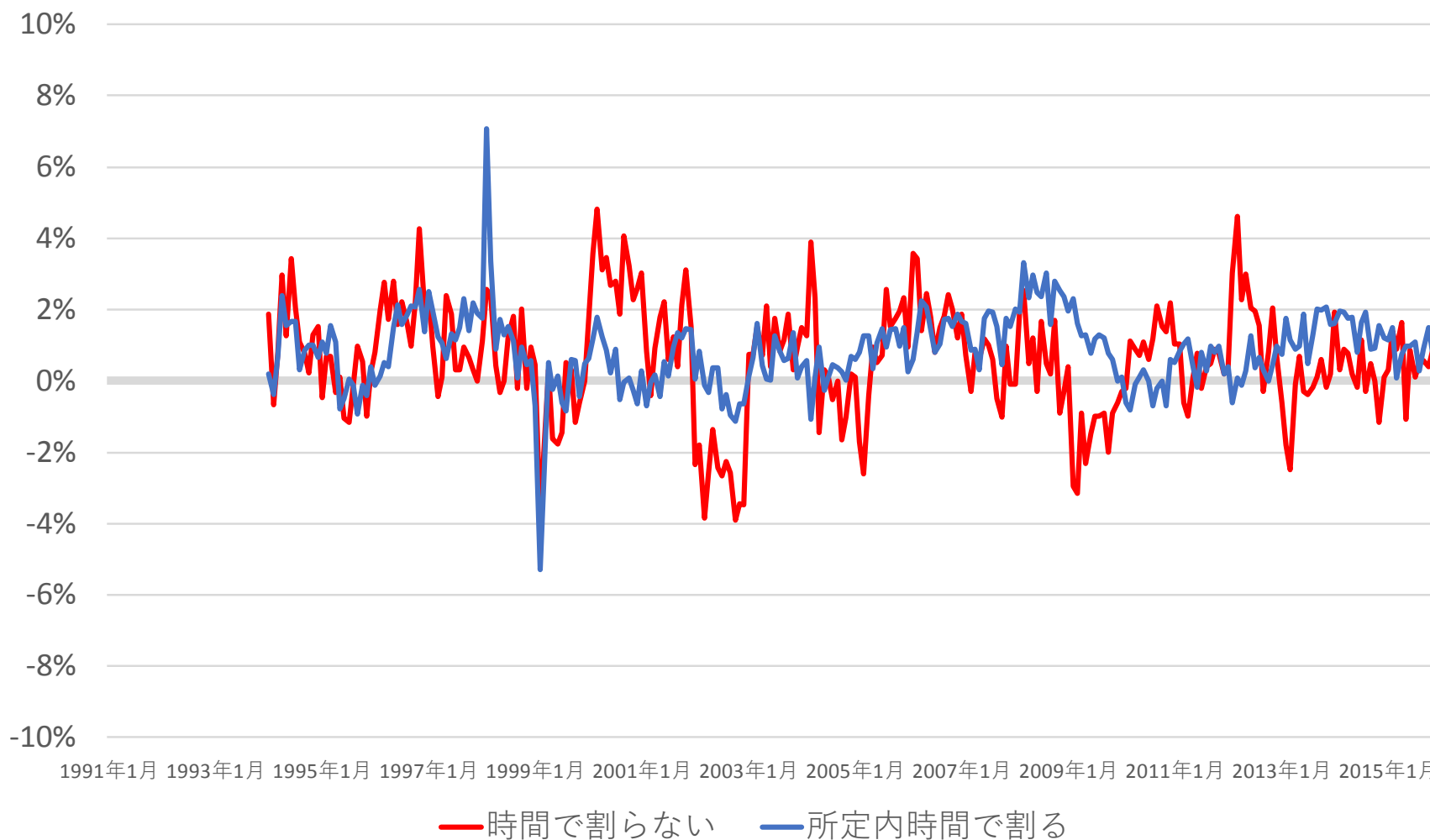
一般労働者の所定内給与、対前年同月比、時間で割らないvs割る

(毎月勤労統計、事業所規模30人以上)



パートタイム労働者は時給にStickiness

パートタイム労働者の所定内給与、対前年同月比、時間で割らないvs割る
(毎月勤労統計、事業所規模30人以上)



(余計な一言)

- (日本型TANKモデルが必要！
 - TANK=Two Agent New Keynesian
 - 通常は消費者の異質性を重視
 - 日本の場合、労働市場の二重構造を考慮した動学的一般均衡モデルが必要なのではないか？)

主なコメント②

残業・時短の影響

- 筆者らも十分認識していることはあるが・・・
- 労働時間による調整 (Intensive Margin) は重要

Intensive Marginを考慮することはなぜ重要なのか？

- 大事ななのは、EM vs IMの相対的な重要性が
国によって異なるということ
 - US: 人数による調整 ↔ 日本: 時間による調整
- その違いを無視することが、このcross country studyにバイアスをもたらさないか？

- 例:「USの賃金が最も硬直的」という本稿の結論は直観に反する。なぜそうなったのか？
- 推測: USは失業率の変動大 $\leftrightarrow$ 賃金変動は普通
⇒ 賃金がより硬直的に見えるだけでは...
- しかし、日本は失業率の変動は小さいが、総労働時間の変動はUSとあまり変わらない→1人当たり労働時間による調整を考慮したら、結論は大きく変わるのでは？

(余計な心配)

- (しかし、このモデルにIntensive Marginを入れるとなると、「失業」はどう定義されるのだろうか?)

主なコメント③

「下方硬直性があるから上方にも硬直的になる」という仮説について

- イントロでは強調されている
- 結果図表には反映されていないように思える。
- この仮説について本稿のモデルから何か言えないか？

- どうやって？
- 反実仮想シミュレーションを使えないか？
 - プラスのショックに対する賃金上昇スピードは、下方硬直性があることで弱まるのか？を分析する
 - あるいは、線形近似によるシミュレーションと、非線形性を考慮した場合でどう違うか？を分析する

その他のコメント

その他のコメント①

これは「失業」なのか？

- 本モデルで「失業」が生じる理由＝労働者が独占力に物を言わせて供給量を制限し、賃金マークアップを要求するから

その他のコメント②

第1次オイルショックの解釈

- Q1 なぜ高インフレが起きたのか？
 - 本稿のA 労働者が突然法外な賃金マークアップを要求したから
 - Q2 ではなぜ失業率は低かったのか？
 - 本稿のA 同時に労働需要ブームが起きたから
- (・・・閉鎖経済モデルの限界??)

その他のコメント③

賃金下方硬直性の「リバイバル」について

- 一時は「アドホック」という理由で学界追放
- いつの間にかまたOKになった
 - それ自体は望ましい
- しかし、そのミクロ的基礎付けを追求することの重要性は今でも失われていない

その他のコメント④

ライバル仮説とのマッチアップは可能か？

- 本稿：名目賃金の下方硬直性だけ
- ライバル① 名目価格の下方硬直性
- ライバル② 金利の下方硬直性(ZLB)
 - 注：本稿は金利データは使っている(Shadow Rate、実際のレート)がZLBはモデル化されていない
- 全部いれたらどれが「勝つ」のだろうか？

関連した質問

- 賃金PCがL型だと、価格PCもL型になるのか？
それとも、それはあまり関係ないのか？

その他のコメント⑤

解法について

- 日銀国際コンファレンスでの討論者＝Arce氏(スペイン銀行):「2次近似では**予備的動機**は捉えられない」→正しい！
- ただし、本稿イントロで強調されているのは文字通りの「予備的」動機ではないような気がする。
 - － では、何なのか？まだよくわからない・・・。
- 「予備的」動機を本当に捉えたければ・・・
 - － 多項式にこだわるならば4次近似まで行く必要
 - － 多項式近似に頼らない手法を用いたほうがよい

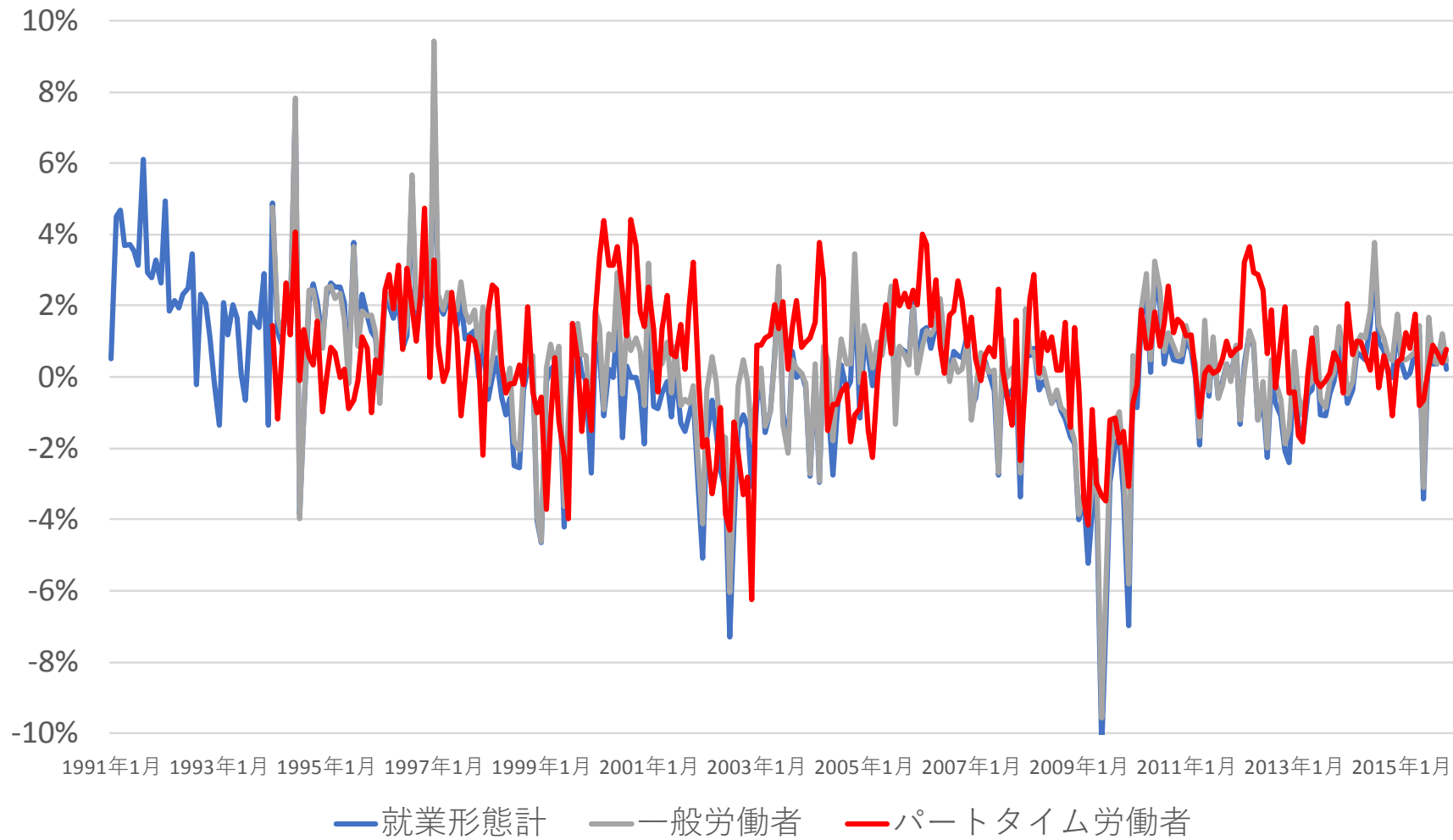
参考

マイクロデータのエビデンス との整合性について

- マイクロデータからの典型的結論：日本の賃金は下方硬直的ではない
- ただしそれは「現金給与総額」を見た場合
- 「所定内給与」については下方硬直性（山本・黒田RIETIDP）

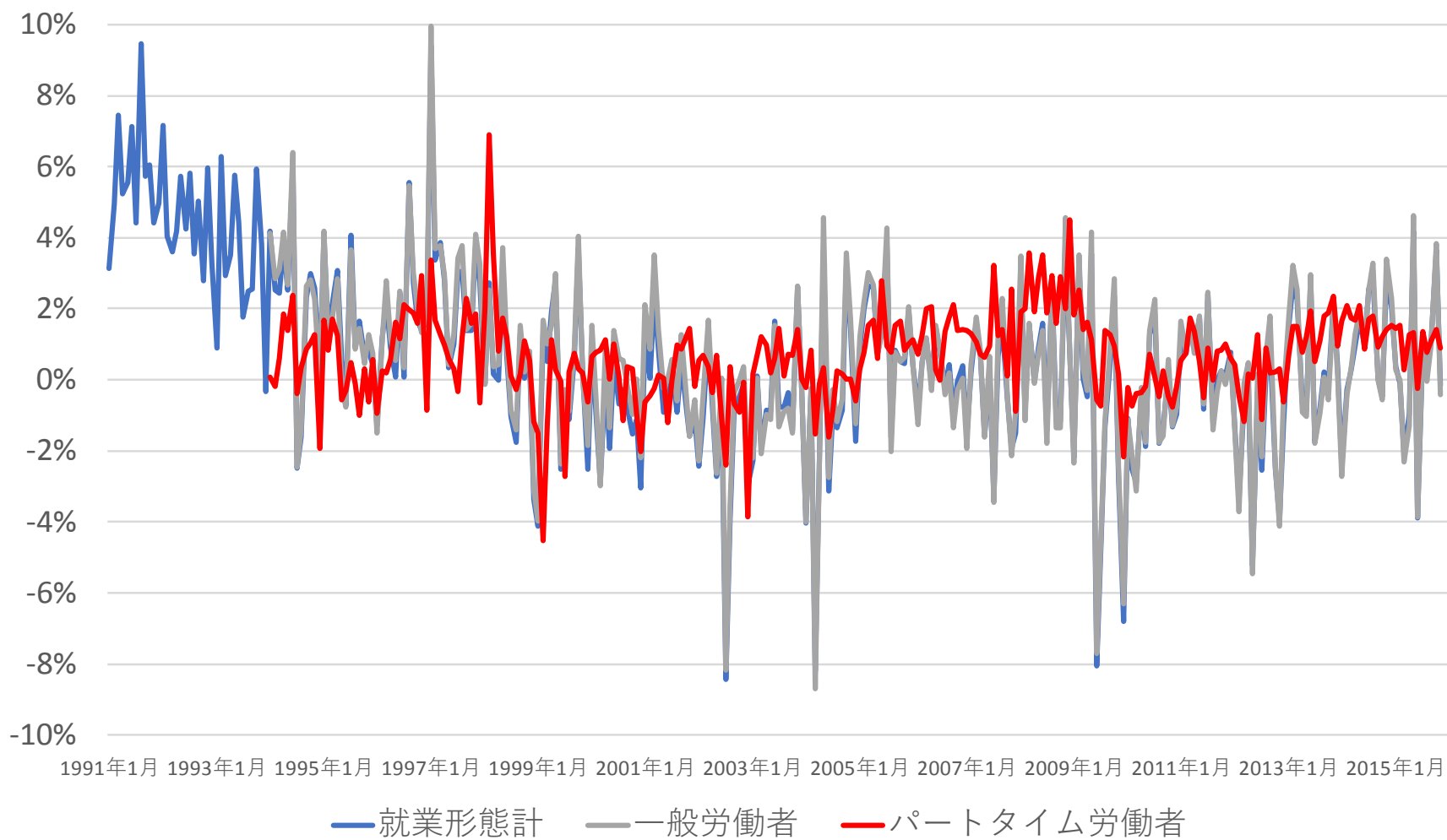
現金給与総額、対前年同月比、就業状態別

(毎月勤労統計、事業所規模30人以上)



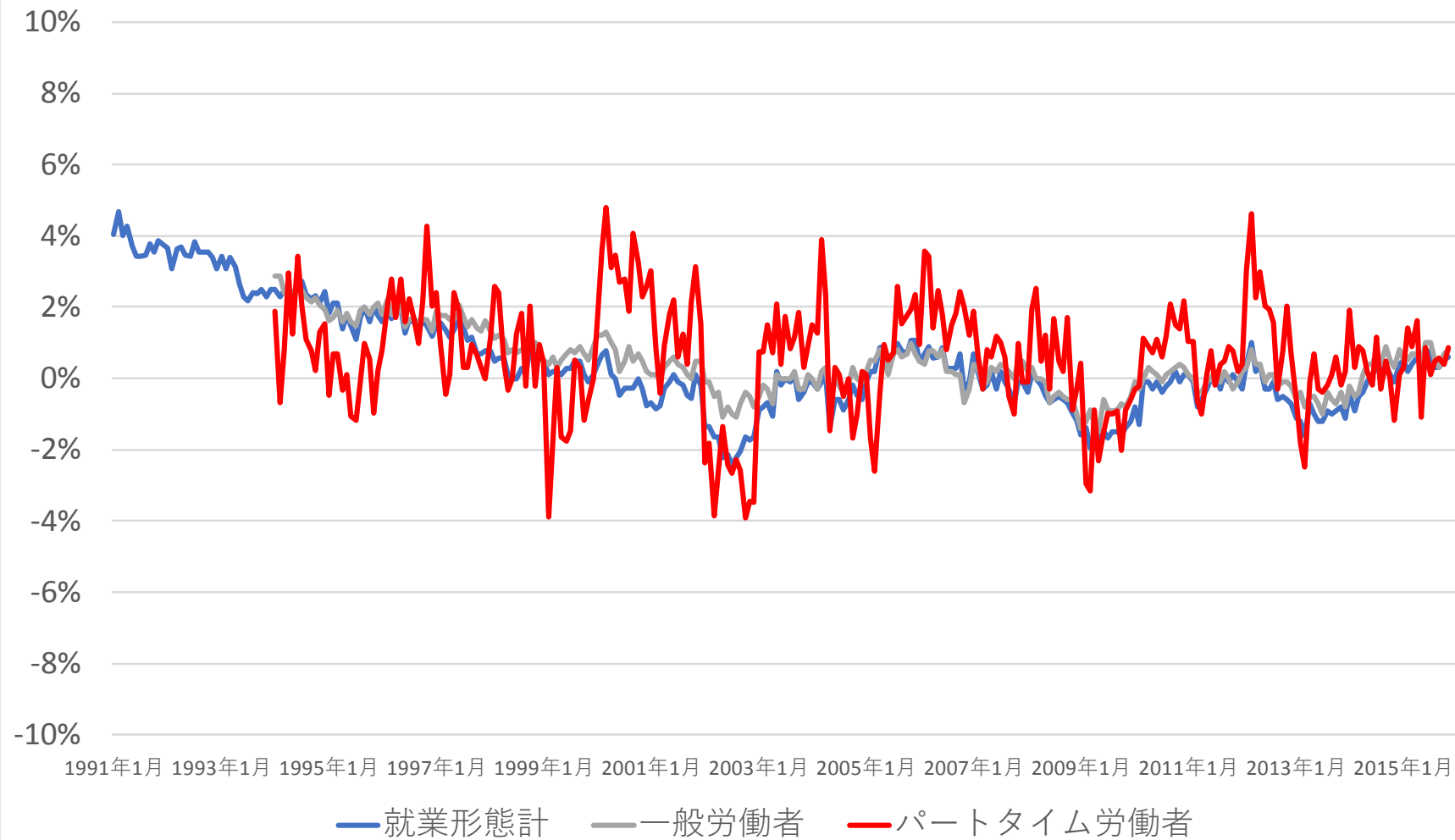
(現金給与総額)/(総実労働時間)、対前年同月比、就業状態別

(毎月勤労統計、事業所規模30人以上)



所定内給与、対前年同月比、就業状態別

(毎月勤労統計、事業所規模30人以上)



(所定内給与)/(所定内労働時間)、対前年同月比、就業状態別

(毎月勤労統計、事業所規模30人以上)

